

特集

Strawberry Dream

苺 Ichigo

に夢追うながはま人



垣見昌宏さん

株式会社長浜合同青果 (田村町) 代表取締役

地元産イチゴの統一したPRが必要だった

現在、長浜のイチゴ農家数は29軒。10年前は15〜20軒だったので、ずいぶんと増えました。イチゴの流通については、これまで個々の農家がそれぞれのパッケージで直接市場に入荷されていたため、市場へ来るまでの生産履歴など、トレーサビリティ(※)が保証できなかったり、小売店側が農家を選ぶようになり、この農家の分は小売店Aへ、この農家の分は小売店Bへ出荷という管理手間も発生し、効率的に流通できない状況でした。そして、何よりも地元のイチゴとしての統一したPRができないことが課題でした。



まずは、地元消費者が手軽にずっと買い続けてくれることが大切です

湖北莓出荷協議会発足へ

こうした課題は隣の米原市でも同様で、これらを克服するため、生産者とJA北びわこ農協、JAレーク伊吹農協などと協議を重ね、平成24年1月に「湖北莓出荷協議会」を立ち上げました。協議会では、「湖北夢いちご」の名でパッケージフィルムや品種別シール等を統一、また研修会を開催するなど、生産技術やパッケージの技術向上を図っています。さらに、農協を通じて市場に出荷することで、トレーサビリティの保証もできるようになり、効率かつ効果的な流通体制が整いました。

そして、湖北ブランドに恥じないよう、よりよい品質のイチゴを生産しようとする生産者の意識も変わってきました。広報宣伝の統一もできるようになり、産地としての知名度・信頼度が向上し、安定した販売につながるようになってきました。

イチゴそのものの味で勝負

イチゴの特産化については、単に特徴がある、値段が高いという見かけのものではなく、まずは市内の消費者がスーパーなどで手軽に買え、「おいしいから、次も買うわ」と言ってもらえるように、品質向上やPRをしていくことが大切ですね。そして、こうした取り組みから、さらにおいしいイチゴが誕生してくれることを期待しています。

来年2月には、都市圏での農産物展示商談会に地元のイチゴを初めて



▲目揃え会の様子

出展します。パッケージなど変に着飾ることなく、今のイチゴそのものの味について消費者から率直な評価を受けようと思っています。

西橋 剛さん

西橋農園 (内保町)

冬の間じっくり株を育てます

平成16年からイチゴ農家として携わり始め、現在ハウス10棟で草姫(あきひめ)、紅ほっぺ、やよいひめ、もういっこ、かおり野の5種類を約2万本の株で栽培しています。イチゴ栽培は、高設栽培という地



もっと地元の人に長浜のイチゴを愛してもらいたい

師走に入り、街中はクリスマスモードに包まれます。クリスマスケーキで主役を飾るのは「イチゴ」。市内のケーキ店でも様々なイチゴのケーキが店頭並び、ウキウキします。また、クリスマス以降にも、お正月などの贈答品、誕生日、家族へのお土産、そして春になるとひな祭り、イチゴ狩りなど、冬からゴールデンウィーク頃まで長期間にわたって楽しむことができます。赤くて丸い、宝石のような可愛いイチゴ。日本人の好きな果物ランキングで1位に選ばれることも多く、子どもから大人まで幅広い層で愛されており、地元長浜でも、おいしいイチゴが作られています。

長浜市のイチゴは、米原市とともに「湖北夢いちご」という統一ブランドで、摘みたて新鮮いちごの宅配や量販店での朝採りいちごの販売など、付加価値の高い販売に取り組んでいます。

今回の特集では、生産、流通、販売の立場から、長浜産イチゴの普及にかける想いを紹介します。

面より高い位置に棚を組んで行っています。今シーズンのイチゴがもうすぐ赤くなり始めるというときに、もう来シーズンの準備です。11月には次の親株苗を購入し、育苗ハウスで世話を始めます。通常は3月頃に親株を購入する農家が多いですが、私は冬の間、親株をじっくり育てます。病気などのリスクもありますが、しっかりと苗を育てることのほうが後々はメリットが大きいと考えています。

3月になり暖かくなれば、イチゴの株を増やすため、ランナーというツル状の茎を土に植える作業を行います。1つの親株から10倍に子株を増やします。そして、6月から8月にかけて同様の作業を行い、子株からさらに10倍の子株を増やし100倍になります。夏のハウスの中は40℃を超え、サウナ状態で、おまけに古くなった土や栽培棚などの設備もそのときに更新するので本当につらい作業です。

9月になると、いよいよ育苗してきた株を定植します。10月中旬の花が咲き初める頃までは、古くなった葉や余分なランナー、脇芽を取り除きます。花が咲くと、イチゴを大きく育てられるよう余分な花を摘み取り、授粉用のミツバチをハウスに放ちます。早い品種だと11月中旬頃には実がなり、いよいよ出荷です。そして摘み取った後は、その部分の茎を取り、新しい茎を伸ばします。その工程を5月頃まで3〜4回繰り返します。

※トレーサビリティ・食品の安全を確保するために、栽培や飼育から加工・製造・流通などの過程を明確にすること。また、その仕組み。